

尋常と不尋常

松下 幸之助

もう四年ほども前のことになりましたが、ある雑誌の対談で大平さんにお目にかかり、二時間あまりいろいろと話をかわしたことがあります。

大平さんは当時、自民党の幹事長をしておられて、日本の現状や将来の方向について大いに語りあったのですが、私の意見にも実に丁寧な耳を傾けてくれました。『お互い国民がその気になれば、仕事でも国の発展でも、道はいわば無限にありますよ』という私の意見に対して、『大いなる楽天主義、大いなる発想の転換ですな』と、大平さん独特の笑顔で応じていただいたことが懐しく思い出されます。

その後、総理になられてからは、月に一回、吉兆会に出席してお目にかかり、お話をうかがってききましたが、政治家としては、いわゆる温厚篤実なタイプで、したがってその行き方に、私は全くあぶなげのない安心感という信頼性というものを、いつも感じておりました。

また、そうした信頼感の一方で、私は、大平さんが総理としてのせつかくのすぐれたご見識を、国民に対しこつあつてほしい、あああつてほしいという形で、より積極的に遠慮なく呼びかけ訴えていただいた方がさらによいのではないかと感じたこともありました。静的で重厚なお人柄に基づく熟慮断行の政治は、大過なく着実な業績をあげつつあったように思います。

そうしたことからしますと、大平さんはいわゆる尋常な政治家として非常にすぐれた方であったと思います。

尋常な政治家ということとは、平凡というように受けとられる面もあって適切な表現とはいえないかもしれませんが、私はこの尋常ということが非常に大事なことだと思えます。

今日のような激動の時代において、世の中を尋常な形で推移させていくのが政治家の大切な役割と考えられますが、そのためには、政治家の方々にきわめて肉実的な力が必要と考えられます。そのような力を大平さんは十分に備えておられました。

したがって変転きわまりないこれからの日本なり世界に、尋常な姿を生み出していく指導的な役割を力強く果たしていただける方でした。その意味で、総理として高く評価されるものを持っておられたように思っています。

それだけに、まだまだこれからという時のご急逝が、かえすがえすも残念に思われてなりません。今はただ、大平さんのご冥福を、あらためて心からお祈りするばかりです。

(松下電器産業相談役)